

そして今、既に亡くなられた戦友に対し、心よりご冥福をお祈りしたいと思います。

青春を海軍に捧げて

愛知県 今泉 一郎

終戦後半世紀余も経過し、年齢も八十の坂を過ぎれば、記憶も氣力も共に薄れてきましたが、「三つ子の魂百まで」の例えに負けず筆を取りました。

私が小学校へ入校した頃は、銀行も休業する程の昭和の大不況（当時近くの鉄道一区間六銭が現在一八〇円）の時代で、経済も世界的恐慌の様相を呈していました。

以後、満州事変、上海事変があり、昭和十一（一九三六）年には政治面においても、二・二六事件があるなど悪化をたどり、遂に太平洋戦争へと突入してゆきました。その頃は多くの赤紙（召集令状）が各部落に届く事態となり、出征する者の武運長久を祈るため神

社参りをする団体行列がよく眺められました。国民皆兵の時世で、私はいずれは徴兵されるであろう、しかし体質上陸軍は苦手でしたので、一足先に海軍へ志願しました。満二十歳の徴兵検査も受け、甲種合格の通知があり、呉海兵団へ先に入ることになりました。

昭和十四年五月末、村人と小学校児童全員に、駅のホームで歓呼の声と小旗で見送られ郷里を出発しました。入団前日は、赤飯に果物付でごちそうの歓送会でした。一夜明けて六月一日、入団式が終わり、海軍四等機関兵の辞令と共に、今までとは一八〇度転換し、覚悟はしていたものの厳しい新兵教育が始まりました。社会生活に慣れた者には、言い訳の通らない絶対服従は納得できないものですが、日が経つにつれ次第に兵隊の型にはまってゆきました。

訓練は陸戦をはじめ、ボート、機関術等が詰め込まれた日課でした。ボートの訓練も、ベンシカ持たない手には水疱ができて辛いものでした。釜焚の実習で手に火傷をする人もいました。大掃除の甲板拭きも大変きつものでした。すべてが訓練というより、軍人精神

を鍛える場のように感じられました。毎月の郷里への便りも強引に書かされましたが、内容点検があるので、「元気で軍務に勉強しております……」のきまり文句でした。

海兵団のすぐ側の高架を走る汽車の汽笛が郷愁を誘いました。新兵教育も一カ月短縮され五カ月で卒業し、海軍三等機関兵（旧称）を拜命し、形だけは軍人らしさに育ってゆきました。

昭和十四年十一月一日、卒団と同時に、軍艦「長鯨」（潜水母艦）に配属されました。生まれて初めての大艦生活で、艦内で迷うこともありましたが。乗艦すれば最下位の兵で、指導は半年古参の三等兵で、二等兵以上とは会話もできない程の階級差でした。機関当直勤務の他に、食事当番や先任者の見回り品の世話や洗濯等で、新兵は朝洗顔するのは贅沢だと言われる程に追いまくられました。

停泊中は十時の消灯後、釣床より起こされ、艦底の機械室へ呼び出され、「貴様等は気のゆるみがある」

と、一人の失敗も団体責任で全員が、海軍独特の軍人精神注入棒（檜の棒で野球バットのようなもの）で数回殴られ、尻が紫色になることもしばしばありました。特に厳しいのは半年間だと我慢で通しました。しかし上陸した際一人が絶えられず帰艦しませんでした。が、その行方は不明でしたが可哀想な同年兵でした。

八カ月後の翌年に、横須賀海軍工機学校（電機科）を受験し入校しました。名に負う厳格な学校とは聞かされておりましたが、まさにその通りでした。入校時、貴重品は全部預けるよう指示がありました。翌日一人が五円玉一枚を所持しているのを見つければ、規律違反と、分隊総員の前で軍人精神注入棒を受け、その場に倒れるとバケツで水をかけ、立ち上がると再度の制裁、見せしめであろうが、余りにも極端な仕置きであることを感じました。

勉強（学業）の方も同様で、休日の外出時も下宿で自習を強いられ、テストの成績によっては覚悟すべきでありました。こうして「成せばなる成さねばならぬ何事も……」の諺のごとく徹底した教育指導で、短期

間に技術取得にあたりました。当校を卒業して初めて「彰」を持った専科の機関兵として扱われるようになりました。

昭和十五年十一月、江田島海軍学校へ勤務することになりました。親切な少佐の教官が見えまして、「学生の後方で一緒に勉強をやれ」と申され、機関術（電機科）の教科書上下二巻を頂きました。それは記念に今もって保存しております。

昭和十六年初夏頃、軍艦「大鯨」へ乗艦を命ぜられました。そして十一月中旬、潜水艦数隻を伴い、マーシャル群島のクエゼリン島にて燃料食糧を補給し、帽子を振りながら見送られました。それが真珠湾へ攻撃するとは知る由もありませんでした。帰路深夜に「総員戦闘配置につけ！」の号令が出されましたが、間もなく味方の巡洋艦と判明し、その号令も解除されましたが、いよいよ危局が迫ったかと憶測できました。

開戦後数旬にして横須賀海軍工廠ドック入りして、航空母艦へ改装となりました。改装中の四月、米軍艦

戦機の本土初空襲があり、当艦も標的にされましたが、たいした被害はありませんでした。

その頃、半年先の先輩と意見が合わず、退艦が目的で呉海軍潜水学校（普通科）へ志願し入校しました。

校訓に「迅速・確実・明朗闊達」の三訓がありました。が、現在の車運転にも適合するものと思います。

卒業後、移転しました広島呉大竹海軍潜水学校の特定制として、練習生の手伝いをしてきました。六カ月後、呉海軍潜水艦基地隊へ転属して、戦地から帰還する各潜水艦の整備作業の応援をしてまいりました。

昭和十九年三月に「伊号四十七潜水艦」の艦装員として乗り組みましたが、完成前に分隊長の指示により大竹海軍潜水学校（高等科）へ進学しました。在学中に海軍上等機関兵曹となり、十月末、神戸の川崎造船所にて建造中の「波号一〇五潜水艦」の艦装員として乗艦し、電機部先任者を命ぜられました。経験も浅く私としても責任を痛感し、毎日工員技術者の方、あるいは同僚艦を訪ねたりして、機器の熟知、勉強に追わ

れました。

「波号」は魚雷を保有しない、機銃一丁のみで、輸送を目的で製作された潜水艦でした。予備機のない一軸、何一つ故障しても潜航はおろか、航行不能となり、太平洋を漂流し、最期を果てるのかと一抹の不安がありました。ただ機関科としては、機械の完全なる整備と、適切なる応急処置訓練、ならびに全員一同が艦長のもと、一致協力、失敗の許されない行動のみでした。

その頃、「伊三十三潜」が訓練中、給気筒から浸水し沈没の報があり、操作の確認指導が厳しく求められました。当潜には先の「長鯨」で新兵時代を共にした戦友（和歌山県出身）がおり、戦後九年目にして引き揚げられ、その遺書を読むにつけ目に涙を誘います。

昭和二十年三月竣工し、神戸港を後にしての処女航海、岸壁で見送りしてくれる工事関係者、応える乗組員との感激と興奮の場面の中にも厳しい訓練が待っていました。一日幾回と繰り返す急速潜航訓練、非常へ

ルと共に総員配置に、エンジン停止、主電動機強速、ペント（潜水用タンクの空気抜弁）開けの号令とあいまって、一米乱れぬ機敏なる操作で、勇ましくもあり、海の男の命がけの猛訓練でした。その合間に米機の落とした浮遊機雷を見つけて銃撃爆破させ、周囲に浮いた赤鯛の料理の美味しさは、忘れ難いひと時の慰めでした。

潜水艦は海中での地味な戦闘で、むしろ艦内生活が苦闘でした。五月下旬、最初の外洋への出発、サイパン、グアム陥落後の、米機動部隊と大型機の哨戒任務で、南方洋上へ進出しました。昼夜の区別なく連続航海で、機関員は外部に出ることもなく、二時間交替の二直制で、急速潜航と浮上時は総員配置となり、十分な睡眠をとることはできませんでした。

潜航中は外気の浸入がないので、高温と湿度に悩まされました。冷房も蓄電池のみの冷却でした。寝台も食卓も兼用で、通路も倉庫代わり、洗顔、風呂もなく、衣服も洗濯できず着たままで、口に水を含み霧吹きして干すだけ。今更ながら良く耐えることができた

と回顧します。四国の漁港へ入り民家の奉仕により入浴したときは生き返ったようでした。

七月上旬、沖繩壊滅後の奄美大島への物資輸送作戦でしたが、既に当時、外洋へは潜水艦以外は出られる状況ではありませんでした。豊後水道を出て数日後の正午頃、突如米潜水艦より魚雷攻撃を受けましたが、艦首と艦底を通り抜け、幸運にも爆破の難を逃れました。

遠方で時限装置による自爆の音が響いてきました。そのため即座に急速潜航して、全機停止しての無音潜航して、ツリムの調整も人間移動で行い、敵に水中聴音されるのを避けました。日没後に敵艦の不在を確認して浮上し、全速で目的地に無事入港しました。

入校後も昼間は米機の飛来が激しく、長時間潜航沈雁して夜を待ちました。酸素の放出、気圧の調整するも、容量の小さい潜水艦です。次第に陸上上がった魚のごとく大きく肩で呼吸するようになり、「早く浮上して」と、声をかける者もありました。日没と共に浮上し、狭いハッチから手送りによる物資の陸上げも

重労働でした。帰路陸軍兵数人の方が便乗せられ呉港に帰着いたしました。

七月中旬、呉の棧橋に繋留中に空襲警報が発令され、沖合に緊急避難して海底に潜航しました。周囲で投下爆弾が破裂して、その水圧による振動、消灯、艦上に破片の落下する音や、推進軸から大きく水漏れする音等で、不安な数時間を過ごした思い出が甦ってきます。

八月六日、広島に原爆投下され、遠く離れた呉からも不吉に眺めることができました。

昭和二十年八月十五日正午、天皇の重大放送があるとの通達があり、兵員室のラジオの前で、襟を正し拝聴しましたが、内容は雑音多く判明し難くも、たちまちのうちに終戦の詔書と伝わってきました。敗戦ともなれば、捕虜として国外へ連行されるとの噂が流れたものでした。

しかし次第に落ち着きをとるもどし、九月初めに一部保安要員を残し、私は復員となりました。艦長より別れの挨拶の中に「田舎の片隅に逃れようと、日本古

来の大和魂を伝え残して頂きたい……」との挨拶の言葉が印象に残っています。庶務よりどこから手にしたか、自決用のカプセル入り青酸カリ二錠を誤りのないよう注意のうえ受け取り、呉駅から満員の夜行列車の窓から乗車しました。途中、貨物列車に乗り換えさせられ、暗闇の中を郷里に向かいました。

家に帰ってみれば終戦四カ月前に祖父は亡くなり、弟もレイテ作戦にて玉碎、母と妹が迎えてくれるという寂しい帰還でした。数週間後に、米軍による艦を呉より佐世保へ回航するよう指示があつて、その要員として召集されました。佐世保港にて滞在中に、初の米軍による艦内点検が行われ、拳銃を向けられての立会いには気味の悪い思いがしました。十一月初め、同じく少数の要員が残り二度目の帰郷となりました。

昭和二十一年四月一日、我が艦は長崎沖の五島列島付近にて、米軍の時限爆弾により処理されたとの便りが艦長より届きました。水深二〇〇メートルの海底で「波号一〇五潜水艦」は短い悲しい生涯を終わりました。

た。

「国破れて山河あり」の状態から立ち上がり、軍隊生活で鍛えた体をもって戦後復興に夢中でした。今や経済大国となり、戦後五十五年余を経過するも、今なお歌にもあるよう、「東洋平和のため」と駆り出されたのに、侵略に服したと言われては、恩欠者、まして英霊も浮かばれないと思います。

さもあれ、太平洋戦争に青春をかけ、歴史の生き証人であり、祖国と日本民族を守る崇高な使命に燃え、若い命を賭けて戦ったことに対し、誇りを持つと共に、命と平和の尊さを語り継いでゆかねばなりません。

終わりに、今なお海底に眠る戦友に対して良心より哀悼の誠を捧げます。